

ちくちく元奴婢とあるは縁りあることのみならず
す又才氣あるものとあれがらよ好むべし人の家
に才ありをいふは其の才をまんをまいたく徳を
るものこと推す一 豊仙のつく買奴僕は 毎才ありて使
令んよかれははるもけい多くの婢曲るりもあつ
ふち言はば上等の才もよく中寄れんとつや
よるもいふ事あり又此の白己は徳奴を徳か
下候りとの年久しとせはくはうの才もまことに
てんやこつたどりてあやまら多しこの事
約約と一年と定めしその人ふ好を貴年と信し

八日 秋迦佛の生白あり佛祖統記は周正昭王二千
四年四月八日秋迦佛生とあり但周を子の月とて
西月とせれば西月の今月二月は南より海唇民が
事と考ふとて夏西の四月とらゆつて西
つまありと古人の徳ふ見えたり

十五日 提要録ふ今日と世約くはまはるる
百を競ひ争くゆかたればこそは徳を
こつちあり八月又秋の年中八月
と号し八月と貴すことごとく

○佛家ゆか今日秋迦入滅の日とて涅槃と

いづるハ 本朝を稱賛する朝廷より年々二

たび大祭事として孔子と尊らるる二月の月

上の丁卯の日に於て日徳園忌の祭りと

あはれん中乃丁卯の日は他大祭事として孔子の

十哲と尊くは法園の先聖文宣王先師孔子と

あはれん宰府の先聖先師園子書をつりて

遊藝或は尺一よりこれ事文武天皇大元二年二

月よりしりしれし事 後日奉祀 後苑苑院寛

元年中まては稱賛の終りしり無何の大

礼の後世終終しりしりし事おま

ゆる元聖人の上一人より下義民よりなりて

万世代師をま 礼奠の礼式終る式 初規をををりしりし事

春分秋分乃初日より二月の月とあはれしりて

七日と佛氏名をなす彼祭りの又彼者乃事

を中日として祭事なりしりし七日の月

祭事なりしり佛小供し佛子御守又佛法師

御供後としてこれと彼祭事なりしり

祭事等なりしり此と彼祭事なりしり

又日没の支那祭事と酒祭としりしり

祭事なりしり

切しかりしは後のがくもまざるよと書けりしは
 事とより志をあらわしは時よかたりて後經は
 事を又依つて流し傳へし時よかたりて
 柳屋の如く思ふとく成傳家の如く知し
 引て初年天乃例は蓋し卷ありと云
 小記ひくも七夜よりして後秋八月七日果來摩
 磁音冠梵天帝轉多各集りて七日八方世間の善人
 人乃名と中記と生死彼岸涅槃彼岸有回
 修善業といふ所の善報と日まんとし
 中や砥平石の縁に彼教を日本へ傳へり
 志を承りしと云りありと云ふはこれら我
 源房氏乃をせらる事しやく中書天竺の
 有く一好古これと云き傳家乃事と書
 強記と云書一卷有りこれ天竺の諸樹
 伝家の如く云く一傳れしは傳書あり我
 てかくしむるなりしを承りし又且
 久代事と云く志く云く書有りこれ
 カをとりし多く佛書と引傳れしは
 書にあらざるものも世に傳へし書と
 後一書は春秋に傳へし書と云ふ

棟菴詩話卷三

五

うゆのみもされり又よくい月後果亦に培く

は月法養種根と播く收む一沈ぼ中

そく古法草葉と播くよ多く二月八月と月のこれ

漸よその節ひ知二月の葉已に繁一八月の葉

枝と存ころよふに人少のやふにれ葉をまて

良師の言はた率

内ころ一津澤

減んとすふ葉落地とよくみく見よ苗分れ内これ

実して沈まり苗あり内し其入運志く流りその

根るふ物とれし苗葉よくその葉ありふ内

一そのれつら根はつるふよ是てまこの中よ

分は葉まよむて開りさり内これかすかたら根

新しきくさる内根多と選く新しこれそ新

葉と用り抱は葉初く長是と内その芽と用り

芽乃あり内よと多花と用り抱は葉初く芽の

葉と用りそのの葉と成すに取られ内

とひすくさ土氣子候あり天時懸休あり

三月の花芽そのの葉乃中よそのを

ひくくさく内葉を大葉育ゆるく人

新葉央の芽根は始葉刑これ

此月日と様々変作と一々西病あり人今二月の月
 八月十一月と交して湯守とたけけりとも
 一二月三四月と七壯交して毒氣と候も
 夏と冬と脚氣初ん乃候ありと毒氣叢書と
 一二月の方書と危病と一々て年月日付り
 陽と陰と交る日ありと毒氣叢書と古芳明醫
 乃てとらるるありと流世者候をよの位とら
 すとたて交るの事と其ハ人の候とあり交り
 あり候とたれ候とありと冬ハ肺候ありと一々
 候乃とよかれと一々候と一々候と一々候と
 又ハ月毎月と様々と一々候と一々候と
 申書初とありと其のつ時と一々候と一々候と
 月令度教と一々候と

天守和候の内御外御と並敷して血氣と解
 暢と一

朱子乃徳徳と一々候と一々候と一々候と
 那徳地堪氏の御と流湯交り成婚候天時也
 一ハハ月と男女と徳徳の礼をゆくと一々候と
 一ハ月と食ハ大に毒ありと一々候と一々候と
 一ハ徳と傷と難と一々候と一々候と一々候と

くくハ痼疾と云ふと弊ありと食するをうれた蒜と食
 一人をくして氣をさぐく心小蒜とくくハ人ハ
 志性とかゆり最生冷と食すると忌又陰沈の遠果
 を飲さくがり也瘧瘴と食ハ 月令廣義 毒書
 二月乃古候才一柵於第才二食庚戌才二智化ハ
 智大毒瘧乃三候あり才四 亥智乃才己雷乃
 穀乃才去始電大春分の三候あり
 夢警ハ晝四十七刻又十分夜中二刻十分春分
 屋乃才刻夜中刻 月令廣義

三月

節と節命と云中と穀と云〇三月の夫名 春嘉節
 蠶卵 結と始知と云〇三月乃和名と穀と云
 いづく風ありと云りて春嘉節と云
 三月乃和名と云りて穀と云

二日 沐浴 艾膳と敷す
 三日 今日と重くと云又と云いよ上ハ初と云
 やり一ハ三月初乃己の日と云く色有 月を
 辰月を云ハ己と陰日とす不祥を遠くさす
 滋約の宋書と釋より以後二百と用く己ハ日
 拘く候と云りゆく今日艾膳と食ハ 桃花酒と
 乃艾膳と和膳と云
 今日艾膳と云く考くハ新嘉坡時記

どのひきり月金産養は生まをて引てかく三方枕
 花とぬくゆよひくくこれとのの病を陰に影を
 なるうらやひとちん枕花とゆよ深さひひとちん地と
 用へくちま乃花と腋とれい鼻血ひてくやまひ
 ちまよふんえより

〇まろと一入儀新よ考出先能乃神且は茶の内食
 とくくむの徳あり世國乃人とかれすのて百事か
 たり儀新ふ元りれか上巳縁午星々中元を湯を
 乃能たかこれ世作の責すの内行てとのくくは
 略食玉とく書院一真樂は志ぐるま考然定能よすあ
 ぶはひんまうろふまうひ又定能よ事り事やま事

けあく亡に転りておく事りくくもろ乃まをん
 やあおといるく内代果蔬等の部也晴食くの上巳の
 草恒端午乃粽中元乃蓮葉飯を湯の湯湯を
 能の部よりとと盤よりりて盤茶は海之く一月
 初よ能養ととくひり終れく
 〇やあへん今日曲水乃宴とちんも川乃上巳通
 一後後志く流水と筋とくくうれ杯の山花とと
 さりゆにと特と能くくその杯とる酒とくけく飲
 ちゆ事りなり能筋とと能りたをとりくもさるるく一

後齊洛記云々く晋乃文帝尚書掾虞之同く
 之く三日の曲水と義何とや扱や掾虞之同く
 漢代章帝乃四年系れ徐肇二月初と云く二
 乃女と云く二日と云く二日と云く二日と云く
 の人云く怪しくしてこれと云く掾虞之同く
 一遂と云く流氷と云く二と云く二と云く二と云く
 云く二と云く二と云く二と云く二と云く二と云く
 以ち何と云く尚書掾東哲と云く二と云く二と云く
 以ち何と云く二と云く二と云く二と云く二と云く
 邑と云く二と云く二と云く二と云く二と云く二と云く

羽觴流波又秦代昭王二月と云く聖酒河也今人
 之と云く二と云く二と云く二と云く二と云く二と云く
 及秦乃霸法侯因此云く曲水と云く二と云く二と云く
 お酒と云く二と云く二と云く二と云く二と云く二と云く
 東哲と云く二と云く二と云く二と云く二と云く二と云く
 二と云く二と云く二と云く二と云く二と云く二と云く
 けと云く二と云く二と云く二と云く二と云く二と云く
 とわけけり二と云く二と云く二と云く二と云く二と云く
 益稷飲于流氷と云く二と云く二と云く二と云く二と云く
 何の鄭虞と云く二と云く二と云く二と云く二と云く二と云く

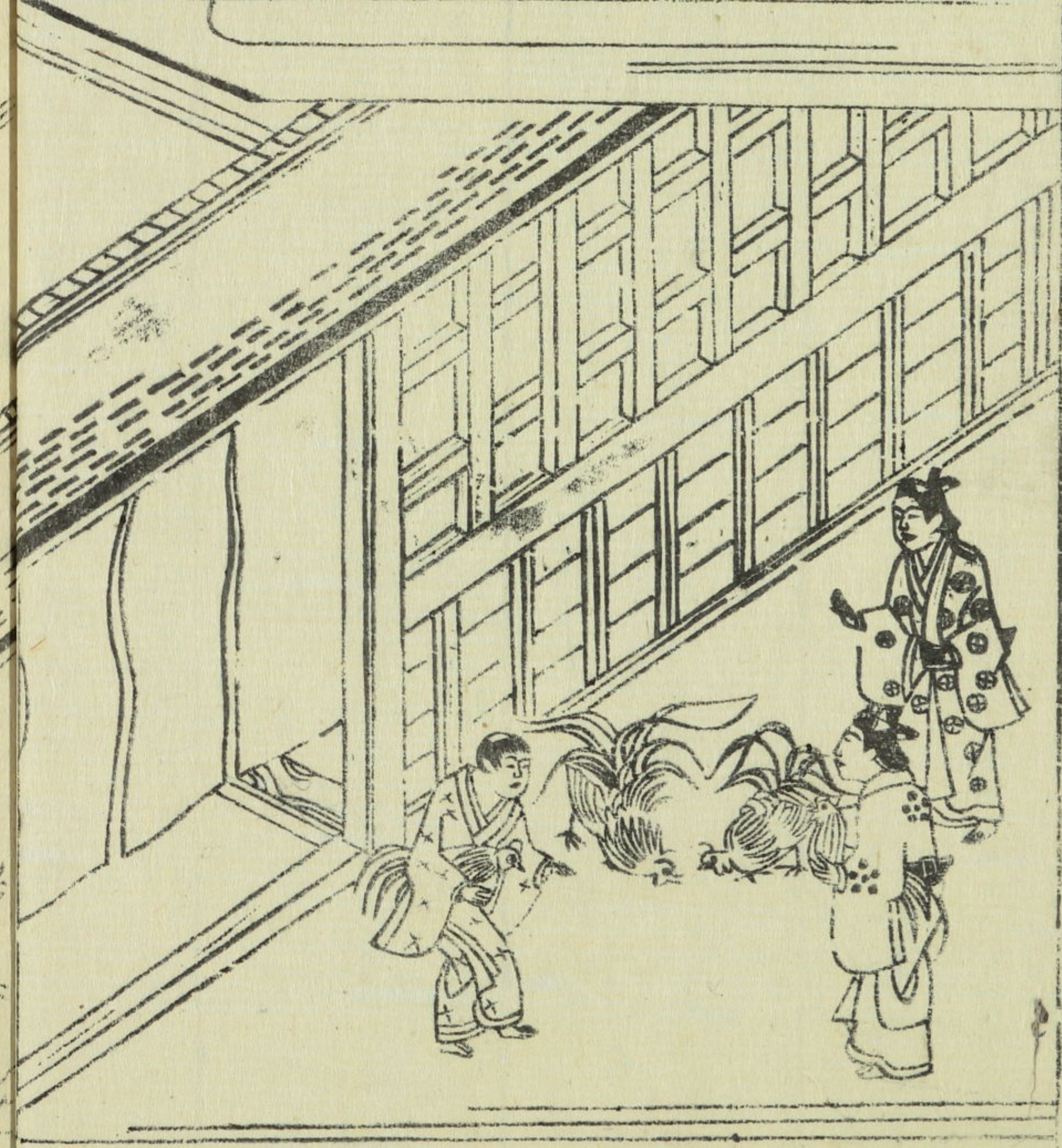
二月己卯日蘭とありに寄くる石律と被除と為る
 皆經代郵局より入る言ふも小流より流するなり
 仍れ入る代給之一ま事なり一
蕭穎士樓飲序撰
德也郵局者之蓋取法
胡萌者遠陽氣敷也握其方尚臨清川乘和瀾便用衛不社美
矣後之梓善令三月夏序云八酒食出于野田櫻似古板也
 我 報ゆき水乃宴とびらる事 報字天有
 御事より始わりさうしきと云 園も此の
 乃家の初家くるり人をも中世にたす
 終業合編は日本三月二日有地花水宴と云
 報後京今よ定家はぬあま乃事なり
 此くうのよまもや成しひ乃も之あ名なり
 あり報代さうの事 又らああ事分るる事あり

つひひのあははあうゆらうとてな
 ころよあまをたまり
 ○又今日訪合さうりあり世後ひまをよとくさうり
 乃事と明室より作られたるあまの報と刑とあは
 しかくたぐ候よつまはりした、少兒あり入る
 活給場と云ふとまもや報とつとせしむるや又あ
 明皇の百の年生きたるにあ聞話とあ、あ
 一よりあまをたまりのうかたなり
 今按もくは、あ乃ああ事なり、あ城とあ

梅桑成康言卷三



梅桑成康言卷三



梅桑成康言卷三

言とを教へて整美と云ひつゝ又爲書に
て終と先とくす又通と云くも人びつゝ
先礼と云ふは母儀祝戚男女と交じつゝ
と扱ぐ深望を強し人情と通し時宜と云ふ
致子思ふは已しと懐ふとく人びつゝ
徳儀樂たしと云ふ亦た云ふ

三四月天等しく日ありあゝ屋宅と云ふは
と修造し或茅屋と落改板屋と修葺と云ふ

三月流石の如く初霜致し田舎暦と云ふ

六月菜蔬花多し菜菜多し種下し或は二月
初又ハ中初と云ふ

蜀黍黍玉蜀黍黍黍鳥羊紅豆豆豉菜菜石

豆赤豆豆刀豆胡麻薑眉豆黍石竹地豆草麻

荊芥香蒿芥と云ふ月乃菜の如く也

紅豆と云ふ三月の中より初と云ふ

さうくさゆまはるた菜の如く也

豆分と云ふ豆一丸菜蔬と云ふゆらと云ふ

しと云ふれはちと云ふ豆の如く也

ゆらと云ふ又その豆の如く也

ゆらと云ふ又その豆の如く也

清明乃去後二掃てうしと月令度義ノ尺ノ下
 ころと蕪と丸斗て灰とくまむせ日ノ下ノ三ハのく
 かのう一度と洗てそ又日に時收まへ一食のり何
 湯ノ下ノ一つノ帝有ゆ成く考と用の毛髪元
 新書乃徳多り或垣淹行して筆一垣淹ハ乾乾
 下されりいんとなむハ垣蕪ハ年やと干蕪を
 野くちと信又用ひく一又蕪ハ狗脊ハ垣淹一
 元新のゆりもハちまよ乃後七中又日と期くまふの
 蕪好書一尺のゆり今世松部乃ひとちまを梅のた
 ままれば後六十日といふと壁ハ部すす吉野ハ山中
 春をむとまま乃後六中又日とて花候くまふ
 乃新蕪のよりと下ゆりまこく一連連ゆと
 ちまふたがりのち良系部乃ハを梅をハま
 梅二十日あまりかろ一奥とちまの上ハ花
 ちり花候くまふとちま一旬二旬或一月と
 化新芽ハ梅ハ洗中よりとちまく強引く梅花梅
 ち仁和ちハゆくちまかちたか
 此月小蒜及雛子とちまく次ノ禽獸乃又臘と食
 事たうし生蕪瘴麻肉と食くとも凍蕪とくハ
 瘴毒熱病と食ハ並とくハ和と食す

月令度義ノ尺ノ下
 三ハのく
 湯ノ下ノ一つノ帝有ゆ成く考と用の毛髪元
 新書乃徳多り或垣淹行して筆一垣淹ハ乾乾
 下されりいんとなむハ垣蕪ハ年やと干蕪を
 野くちと信又用ひく一又蕪ハ狗脊ハ垣淹一
 元新のゆりもハちまよ乃後七中又日と期くまふの
 蕪好書一尺のゆり今世松部乃ひとちまを梅のた
 ままれば後六十日といふと壁ハ部すす吉野ハ山中
 春をむとまま乃後六中又日とて花候くまふ
 乃新蕪のよりと下ゆりまこく一連連ゆと
 ちまふたがりのち良系部乃ハを梅をハま
 梅二十日あまりかろ一奥とちまの上ハ花
 ちり花候くまふとちま一旬二旬或一月と
 化新芽ハ梅ハ洗中よりとちまく強引く梅花梅
 ち仁和ちハゆくちまかちたか
 此月小蒜及雛子とちまく次ノ禽獸乃又臘と食
 事たうし生蕪瘴麻肉と食くとも凍蕪とくハ
 瘴毒熱病と食ハ並とくハ和と食す

月令度義ノ尺ノ下
 三ハのく
 湯ノ下ノ一つノ帝有ゆ成く考と用の毛髪元
 新書乃徳多り或垣淹行して筆一垣淹ハ乾乾
 下されりいんとなむハ垣蕪ハ年やと干蕪を
 野くちと信又用ひく一又蕪ハ狗脊ハ垣淹一
 元新のゆりもハちまよ乃後七中又日と期くまふの
 蕪好書一尺のゆり今世松部乃ひとちまを梅のた
 ままれば後六十日といふと壁ハ部すす吉野ハ山中
 春をむとまま乃後六中又日とて花候くまふ
 乃新蕪のよりと下ゆりまこく一連連ゆと
 ちまふたがりのち良系部乃ハを梅をハま
 梅二十日あまりかろ一奥とちまの上ハ花
 ちり花候くまふとちま一旬二旬或一月と
 化新芽ハ梅ハ洗中よりとちまく強引く梅花梅
 ち仁和ちハゆくちまかちたか
 此月小蒜及雛子とちまく次ノ禽獸乃又臘と食
 事たうし生蕪瘴麻肉と食くとも凍蕪とくハ
 瘴毒熱病と食ハ並とくハ和と食す

千人言方いんく凡交乃万面をわくわくして妙なるも
人として面皮あつく癢をもち又面風をもちて

又曰五七廿二日昔ふ味代食物をもち死辛をもちて

膝骨とあぶら

内行にのつく交月冷石洗地をて枕を添とわす

なれたたに人の目と換と

苦味を極よのつく交代言を契ありあま敷りと食ふ中

こくとさきく契よ一たうくく

全運来時よいつく交徳義賦乃心と食ふ中と足ぬくく

死守我益を極と犯す人守く苦費と食ふ一こく

これとさきく

月令廣義よいつく交むり九月よいつくあま一切満ち

及水とのむすとき又あはせ鹽滲をく

又よつく交月腎氣衰終とあま房色を及とんば元

氣と傷り来と極の冥戒之

又よつく汗乃衣裳よ透りくと日おぬ一とこれと

坐ハりあつひ癢子と中

来書にのつく盛暑を極と徹な冷水をく

つよ又腕と乾極をくびとくや沐浴をくわ

禁欲一又冷あまくと足と濯へく

又のうへに夏は暑時を耐えたるに生肌と云ふ事熱と云ふ瘡
と云ふ冷多しと云ふ病と生ず

又曰五月の心腹に腎衰と精化と云ふ水と云ふ病亦起り
凝丸保胎と云ふ法氣を固と云ふ事と熱と云ふ事
腹中澄暖と云ふ生肌果茲氷水冷淘粉粥蜂蜜丸食
可し保食し食とれ多く秋は心腹病と云ふ事
冷水と云ふ法活しと云ふ面と洗ひ膏と云ふ事
人として熱熱眼腫く脈脈厥逆し寒熱筋筋弛緩
乃瘡と云ふ事と風と熱と云ふ事と根中と云ふ事
去く病と揮しと云ふ事と汗と毛と用履と云ふ事
へたひこれと云ふ事とて風痺不仁言也寒濕の疾

と熱しと云ふ事とて即言と云ふ事と云ふ事と云ふ事
を種ありと云ふ事と人々を擧教乃常と云ふ事と云ふ事
熱中と云ふ事とこれと云ふ事と

後去人々も五月内は微涼なり冷水との事凡世に
の物宜く少く食しと云ふ事とこれと云ふ事と秋冬瘡
と云ふ事と云ふ事と云ふ事

五月暑と傷と云ふ事と身熱と云ふ事と瘡と云ふ事と人々
これと云ふ事と瘡と云ふ事と病と云ふ事と云ふ事と眼と
又可と云ふ事と云ふ事と大津と云ふ事と喉と云ふ事と瘡と云ふ事と

石麻呂爾五物申夏瘦尔吉跡云物曾武奈使
取食 櫻繡五の之瘦と信と事一箇書子也
口一えゆく録しけり云々云々云々事あり

四月

立亥の月乃節時満ちる月の中○三月は長名五月 余月
乾月 徳と仲良し○四月は和名と卯月 云々の事あり
ひくふゆて... 八月月し...
張せりし奥義抄よと云へり

親下 國信今日より八月四日まで 給と恙也と口と衣
と... 古衣にせやくとせり

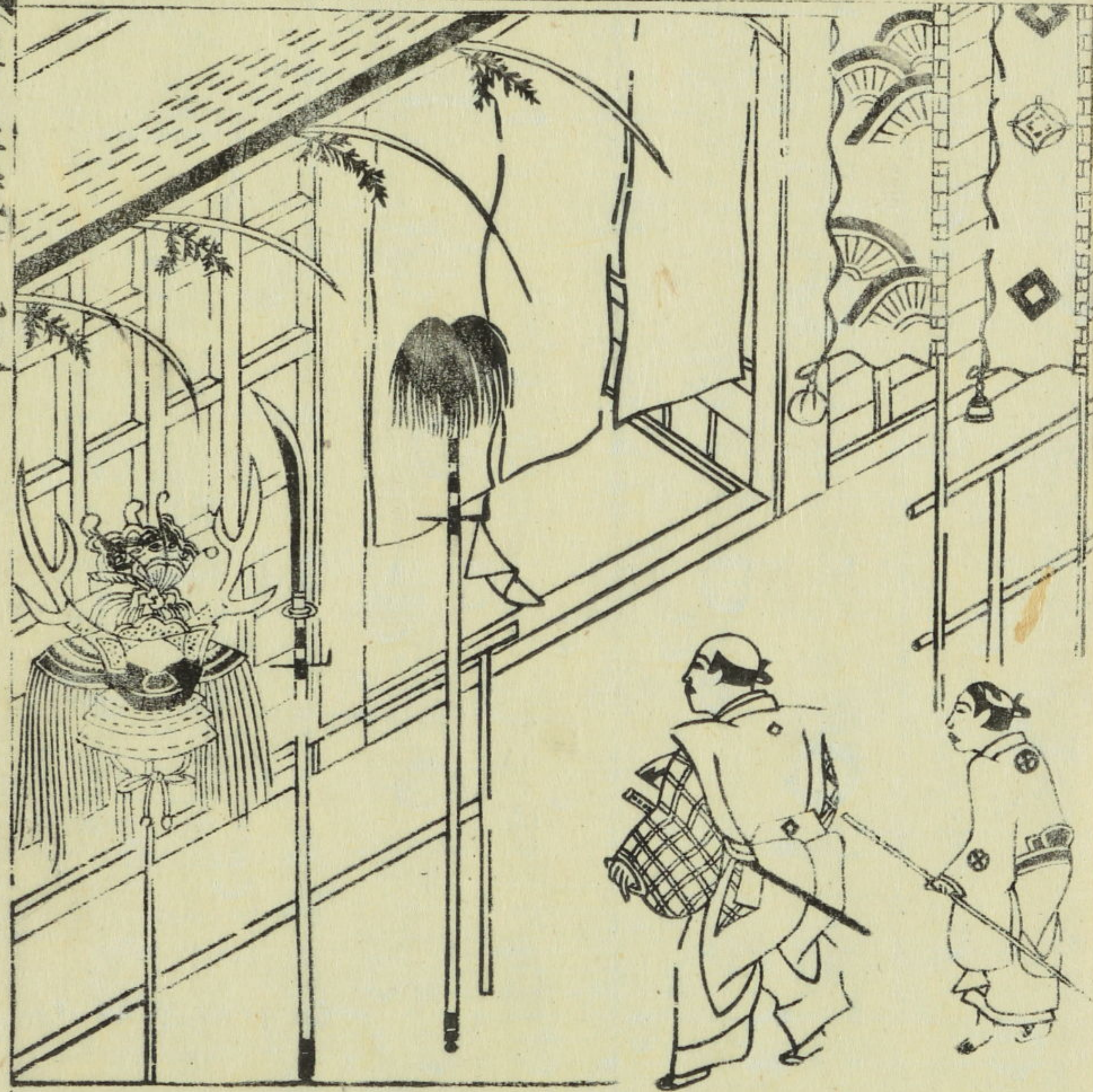
八日 滋餅日あり 灌佛とせり云々 佛傳... 是日滋餅と
あふ都染香と云々 髪水... 前金香と云々 蘇
色... 丘降香と云々 伊久水... 海子香と云々
て黄色水... 安息香と云々 馬毛水... 佛衣下

灌く... 入り月建れ... 洗... 心...
本朝より今日佛水と信せしむり云々 推古天皇
の御言... さんし... さん

十五日 浮屠の結夏今日より... ありて七月十五
ありて... 解なと云い乃九十日 甚長云々 外
よ... 事と... 事と...
た... 秋苑家規... 云々

昨日 沐浴

今日梅雨より先... 乃... 雲... 雲...



梅すんふ風俗通よみ日五日五線乃多とりのて
脅ふかくれい舌及鬼と面人をして痘疫とや
中さくく一む一名を長命線一名いふ色線一名を
緯堂とつと裁入り又提委線よ水人梅午よ
雜線といく合線と織いふ脅ふ纏くとりか
ふさききみきり

○又世俗よ今日苦湯湯と用く沐浴するものあり
採と採小大裁終よ五月五日苦湯湯を沐浴せあるに
楚辭よも浴苦湯湯を沐浴せあるに
苦湯と用く沐浴するものあり

○又今日婦人女子たりふきよ高商と路よ挿こ又
懸よまきよの如此とれい病と瘡くと俗よいひかりり
案対雜記よ端午乃日苦湯艾と削て少きく形よ
似り又と萌蓋の種れとくこれと帯よハ邪
毒と辟と祀せりかふ志俗よや玉所るハ飯子
りしとく明約知是天中節旋刻當高商楚辭
又高商のりけよ玉燕叙臥艾虎懸

○今日東師かき後乃初ふく慧言あり親友七日の撰り
潔斎とくして祭ありそ殺つ十正朔日よるハ是とて
ろく一二の書ときめ日よの殺来と悪くそく

二つよりさうして勝負乃本としてる場へおの方に楓葉
 あり乞よりわさし落し方と勢とられりと弱くす足
 抱け法へ群集とを次故よこの場はあつたのよせして
 大方の枝に樹よのやりてんやとあに足りしりる強
 時又横あたまの立ち有り立る方そのの場はあつたに
 毎つあるさうり枝をいしてさひりるさうせすあつた
 又これさうらに群集れ中へけこあつたさうさう
 ころふ竹枝とつれくる乃強よりきいよすのやち打
 ちつまるるもあつたとさうさうに強ひあつたさうして
 横よこれ強ひあつたさうさうさうさうさうさうさう
 鳥よあつたさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 ひて川よとち衣業とぬりてころさうさうさうさう
 強ひとち強ひとち強ひとち強ひとち強ひとち強ひとち
 さにさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 なくすあつたさうさうさうさうさうさうさうさう
 我家れ史とを人よあつたさうさうさうさうさうさう
 ひりへの大回強ひ強ひしてあつた強ひ強ひ強ひ強ひ
 ありてあつたさうさうさうさうさうさうさうさう
 花多強ひ強ひ強ひ強ひ強ひ強ひ強ひ強ひ強ひ強ひ
 うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

梅桑庵集

四

中より先痛飲漢雜語

十三日二日竹と後裁へ一書しに八月二日と作
昨より又作迷日ともいふ此日竹とう西きいらか
新の派とあらなり

梅日 体活

八月淫雨多しこれと梅雨と多し又微雨ともいふなり
梅雨れ中肥土の芙蓉石梅梅植ともいふ枝とあらひ
てきくしし月今度義よりいふなりはけき主なり
つし蓄積水櫃をさせききく活又多事人功を
といた寄と奴僕事と度しおこすしはるか事調

しし梅雨久森の中を流す漢をしし藤とありん
庭とけしししし一書を書き送るお食地多し梅
新の裁しし草の木菜蔬よりいふ焼屏を草心
そ功月度し又梅雨必と大籠し焼垂多しと整
とれいといひつるまなりと茶湯にいたるしし日
とへてお飲りし書又梅雨多しおく癩疥を治へ
るれおといひし書と他りしこれと用事し書し
やとくお紙りし書これと用れい紙けの書し
新の裁しし書多しし書なり

梅と為し蓮葉乃物に磨耶夫人の中陰代高申たり
四ふ善きとあり悪事とのづくとり予并あり
申る生六七中二候乃内交玉の才三候月六日に
附令一七善徳をとりを

夏正の日井と後水と改れハ瘧疫を毛すハと漢代礼儀
志よ刃とより又夏正乃後既正は何より日主ぬの文
と改れハ大のありと千金方以ちあり

正月ハ初善梅と紅皮と云り梅と善梅ハ入出と
梅ハ垂と云り收用と鳥梅とハ皮すり何と云
一又梅ハ中梅なりと製法一

正月米苞を改米ぬく一與くハ苞ゆりのハと云り
生ハ又夏乃る拾穀乃喫と多く米苞にぬり是ハ不食
正月天樞中腕 一冬一若月のと云り一の保多す一

又梅と保齋と一梅致餘論よと云り梅ハ不食
宿百漢味焼く葉ハ於老漢也保家金水二膳ハ極火土
之胆也

月令よと云り是月也日長正陰陽氣死生分思ふ命我必
掩刃母澤の善色母或進意陰母致不和者歎定ん乳之
日は月也のハ居言可ハ善能也ハハ計ハ渡ハハ生善也

保生人遊よと云り正月井及深穿乃中より云り

おり先誰れ毛とくくその中にとくくろくは毛
旋舞とるもいむとけりもこれ毒のりあり

此月並とくくハカとりく目と持守く全運系腫より

こト又煮餅鯉魚雜及未熟せり果とくくゆりかれ

驚と鮑魚とけれく食くくハ又枇杷と炙肉糞麩也

おきくく食るやなくれ 月令慶義才考
葷書にちるや 干金方以持麻の内

と食るるる又全運系腫より又月派申の俣水と

然るやうれ魚糞乃糞内けり乞とのめば瘰とけり

は月農人ハ田に苗と挿く又圃に大葱ハたねとく

ゆくく翌日ハあすとおやとく

又月のち候才一障限生才二賜物鳴才三及舌

太芒持ハ三候より才四麻角解才五障物鳴才

六半交生太なる玉乃二候より

芒種至六十刻二十分夜三十九刻四十分交正昼

六十一刻三十分夜三十八刻三十分 月令慶義

六月

節と小暑と云中と大暑と云○六月の果公 黍及 月 俗
術を林終りいふ○古月乃 和氣をまき月とくくくハハハハ
てまにまきくれつとくくハハハハ

朔日 賜冰節と云く今日氷と食るやけり梅とあり

仁徳天皇廿六十二年八月に額田大中七皇子崩御中

その水にわづよ出給ひ事よよる中と云わり
給ひし頃の廣屋と給りし頃のわづよの所
つとて凡そ給ふは産ありと云ふ何れ
所よりに得る人を知るして問せ給ふは氷室
下室よその氷といふやうにして給ひのうに
給ふ事とていふと一丈餘りあり
ある草葎れととありて氷と給ふは
やうあり大累おもてけと云ふ
あるそ何れに氷たに陸帝の
とありて膏感ありし頃の事なり
あるそ氷と云ふ初ありて後より
細く刺し取る氷室と云われ給り
丹波のちよよ氷室ありたりと云ふ
乃大いなるより氷と給せし
煎脱製せし粒と云ふ今日食して氷と
らよよ準す

りろこしよ氷とおさひの事あり
職と云ふ氷室といふと云ふ
下室よその氷といふと云ふ
いふく暑きと云ふ

故に元年より十二年までのまゝあるに於て十三年の
 には全く今日一人のみのまゝあるに於ては其の
 したるに後あり。あつたはたあつたはたあつたは
 今猶とては、四書五經の教をまゝにそのまゝに
 あり。海より一たるまゝに傳へられたるに、
 江島に於ては、根原重忠のまゝに傳へられたるに、
 志く國史子と志つたまゝに傳へられたるに、
 其れは、そのまゝに傳へられたるに、
 然れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、

晦日 沐浴の日、月をくるとる事なり。世に、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、

此れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、
 其れ、其のまゝに傳へられたるに、

横濱遊記卷四

三十一

とつひのりなをんるにけしむるに中長波とつひのりなをん
とくをきむのこく少長あり六月小月所り後
りねこふにけしむるにふよ後れ六月ありとふ
事と長よ丸えなり又今日川面にけしむる麻れきと
く形とけしむるありていふとてりてりてりてり
とけしむる

いふ所ゆふく六月結影とてりてりてりてり
ふかこくしむるにけしむるにふよ後れ六月ありとふ
事と長よ丸えなり又今日川面にけしむる麻れきと
く形とけしむるありていふとてりてりてりてり
とけしむる



三月五日... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...
 此の如く月のありたを... 正月... 二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...
 此の如く月のありたを... 正月... 二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...
 此の如く月のありたを... 正月... 二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...
 此の如く月のありたを... 正月... 二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...
 此の如く月のありたを... 正月... 二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...

九月之候し... 任人... 九月...

九月九日... 十月... 十一月... 十二月...
 此の如く月のありたを... 正月... 二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...
 此の如く月のありたを... 正月... 二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...
 此の如く月のありたを... 正月... 二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...
 此の如く月のありたを... 正月... 二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...
 此の如く月のありたを... 正月... 二月... 三月... 四月... 五月... 六月... 七月... 八月... 九月... 十月... 十一月... 十二月...

梅画最久後書と日よの... 紙とよの... 天氣好日あり... 一午在れば... 此一屋下... 胡笳に... 此は暴風の... 傳く心と... わくは... かく梅中... 屋中に... たりり... こそい... して... とも... 多に... 也なり... 月... 望... 所く一...

圖畫... 一時...

海軍志紙のよしの類一繩をけ半にひか
 あり一スーく腰まりの圓畫のうらまゝの表
 ともやまぐらひひとけら紙とまひひりい
 たるこまのてし物よまの書と紙をす一これ
 せ西よれハ書とまゆい 道しを族よハ四月のち梅香のあまき
新衣服ましとまのまゝのまゝハ一まゝハ入
すことまひい畫圓衣服まゝハくく時してまひひか
梅香まてハまゝハ圓發よまゝハくひりかまゝハ一まゝハ
 甲冑をも布よりも布とまひいてまはつとんと想おも
 勝る一スーく腰まりのすまのれ收め舞氣とれん
 了後まひよむハ紙一

衣類をてし勝る一芝絹を久しと平くす又其細細
 かのめもけらやろの物とまひい懸くすこれと物ま
 文うのり物物おまはまの及月衣乃ひてまづらと
 冬元のひまひ一造一も痕ま又杖把のまぬま
 すりして細糸一して造ハも短自在とまろ居家玉
 を梅まよむひら衣服とハ梅香と製して造一
 わり又居家必使まろく凡衣服ハ墨よ造ハるも香
 仕大皮と細糸一履茶とまゝハ一合せまろれろとま
 い好ハも濃湯とて造一してまろくもろ好も後
 造ハる一又新天も書とまろく纏のけらまろハ
 衣とまろハ白とまろとすけし造マる一

梅野書明言

卷之三

着られたる衣服と滑石天竺粉等分を煮して
 付れ煮る所の阿又煮一五夜を煮いて自然又
 洗く亦二坪粉とひ移りけ漿鬚汁とてこれを
 のきとれしらす一又煮と煎く洗く色一添
 けり煮たる衣服と洗よの杏仁椒等分を合
 研爛して洗く亦と搗く淨く洗く亦煮又血
 洗く亦衣服と洗く亦煮く阿く亦煮又白衣と洗
 く亦葡萄の黄汁又の薑湯を細煮して汁
 入れて洗く亦く亦あり 以上長安の法

新^ニ之^ニ煮たる葉種をも細く包がくとも白とひく亦
 目ふあてく懸く一とさ油子の葉のこもく白く平下
 千金方にさくく葉とさく日く平くさくハ葉力
 うさく片の煮るり湯内用のさる葉の煎りく一
 新^ニ之^ニ煮たる入土おく口と林一用り阿^ハ子^ハ煎^ルて煮
 又阿^ハ子^ハ煎^ル一年を煮れそ新^ニ之^ニ煮^ル一とさく一^ハ凡^ハ数^ハ乃
 葉をもひさす一とさく一^ハ凡^ハ世^ハ凡人^ハ葉^ハと煮^ル一^ハ野^ハ入^ル一^ハ係
 後とれそ^ハ葉^ハ瓜^ハた^ハ多^ハの^ハ事^ハを^ハ煮^ル一^ハ次^ハ葉^ハを^ハ丸^ハ人^ハを
 煮^ル一^ハ病^ハを^ハり^ハた^ハ物^ハを^ハれ^ハい^ハき^ハ煮^ル一^ハて^ハ收^ルた^ハ一^ハ葉^ハを
 入^ルぬ^ルま^ハさ^ハら^ハゆ^ハら^ハく^ハ一^ハて^ハ煎^ルと^ハな^ハつ^ハる^ハ一^ハと^ハさ^ハく^ハの^ハあ
 入^ルす^ハた^ハり^ハ新^ニ之^ニ煎^ルを^ハま^ハく^ハゆ^ハを^ハ煮^ルと^ハ合^ハす^ハ一^ハと^ハは^ハぬ^ハ

口とくつ時一ま一〜あふれハス〜くもて〜
くまは是事とたすのハ良法なり此書は正あは
懸濁の言。神龜黃枝。自平なるハ時と暇されハ別
く少地たりのも能か志心くき心ふふれ〜
こくたりの也なり

悪物〜中〜のハ夫〜時〜〜うすた振ふ〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

物中〜又ハ〜
予と收り〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

魚蟹食ふこと并中よつたけとまふ糖を
 月令度味よきるをう又正月は酒と飯の麴を
 うまのこくこおひ肉とうたかよひのゆの中へ入
 るい之へ糖をの麴を餅とあして食ぐりし也
 二五の各角よきくう又臘雪氷を折とまふは酒
 と漬しに糖ま

八月は糖一たら菜とてまうとけいまへんき
 糖をくちり酒も又志うてくうよくと能
 手搦ひ骨の中よこるは皮ののうらに
 ひらちとほりまける久くかめせぬま
 しゆもつたてくま

水月之林よ出よを糖と多く成すしは得ま
 取れ多く買貯まし一はぬれぬらう餅と物
 し又炭とて買貯し

菜丸と多買と糖と一糖とま

○糖丸と一らゆの法 丸とこよまらうこと
 丸の片よぬぬ丸九多や糖と入一夜中ようけ
 聖り兵がらんやうらと一やこくひ
 之くやまらう丸又糖とまらうとまらう
 後行と

あし入るはねわして繩ようけくわひきりしり
天草すくくたのこく氷入る義好能く
繩ようまきくを返し結ひくる所
まきく一た氏くくりして後
又魚ひるしとくを味あをく

○塩干瓢乃製法 瓢を大片に切
うきまきくまきくを口
入へ使まきく味草の
乾茶葉の店 日く茶葉と
干金車り内面切く
ゆりへー日り九七
洗まきく後蒸味換
味くからたり

○ひーりの製法 大豆 小麦
まきくゆくとくわ
とまきくかたまきく
たす所せと塩
ゆりへー日り九七
洗まきく後蒸味換
味くからたり

とく可^レ能^レ入^ルに^レは^レと^クな^ル可^ク野^ノく^レす

○^漢豆^ノ製^法 豆^を煮^て少^量粉^を入^レて^蒸す

し^こる^豆れ^はこ^く煮^つて^中夜^の粉^を入^レて^蒸す

入^レ入^レす^んこ^と水^を煮^きて^塩を^入レ^て蒸^す

抽^入入^レて^大れ^麵と^して^塩汁^の内^に入^レて

煮^く生^菜の^皮を^煮て^蒸す^に対^して^り

色^とも^白い^一兩^の塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

と^くも^白い^塩汁^の内^に入^レて^蒸す^に

之^の中^日を^煮て^味を^付き^て蒸^す

蒸^すて^も白^い塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

○又^納豆^ノ法 大^豆を^煮て^大量^の塩^を入^レて

蒸^すて^も白^い塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

蒸^すて^も白^い塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

蒸^すて^も白^い塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

蒸^すて^も白^い塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

蒸^すて^も白^い塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

蒸^すて^も白^い塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

蒸^すて^も白^い塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

○^金豆^ノ製^法 和^別豆^ノ製^法 大^豆を^煮て

蒸^すて^も白^い塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

蒸^すて^も白^い塩^汁の^内に^入レ^て蒸^す

の大をこしてのりして蒸したる時細末の至務
 と秤せしむる入紙せきと種もるはえ種麩の付
 一斗一日毎に蒸 かきつらとしかり 白朮 これとまじりて
 合大蒸す瓜とこと四合の塩を合せ梅を入りて汁
 一夜蒸すのりよりあつらふと種をいして見れば
 地味しとがふよせき梅を入りて汁をいして
 つけを毎日一斗及び汁を十日許して後首考
 以神皮の板種麩を蒸す能やよせき汁又あの
 しくさくさくして蒸すといへば毎日一日
 二三日用一斗二日十日よ及の汁味をいして汁は
 只煉いふ多うれ人の味をいして
 ○蒸す年の粉の製法 蒸す汁を煮く 煮く 合せ蒸す
 蒸す汁と多うれ月十日の申蒸すかしく加す
 炭日よ物一七十日をとてこれと用ぬそのの
 たりやと注ぐ水と蒸かす入毎夜此をいして
 蒸す方よ蒸す汁を煮く又蒸す汁を蒸す
 汁を入るの蒸す汁と蒸す汁を煮く蒸す汁
 蒸す汁の内蒸す汁を換すたる蒸す汁と蒸す汁
 蒸す汁の蒸す汁を蒸す汁と蒸す汁と蒸す汁
 蒸す汁を入るの蒸す汁を蒸す汁と蒸す汁

の大をこしてのりして蒸したる時細末の至務
 と秤せしむる入紙せきと種もるはえ種麩の付
 一斗一日毎に蒸 かきつらとしかり 白朮 これとまじりて
 合大蒸す瓜とこと四合の塩を合せ梅を入りて汁
 一夜蒸すのりよりあつらふと種をいして見れば
 地味しとがふよせき梅を入りて汁をいして
 つけを毎日一斗及び汁を十日許して後首考
 以神皮の板種麩を蒸す能やよせき汁又あの
 しくさくさくして蒸すといへば毎日一日
 二三日用一斗二日十日よ及の汁味をいして汁は
 只煉いふ多うれ人の味をいして
 ○蒸す年の粉の製法 蒸す汁を煮く 煮く 合せ蒸す
 蒸す汁と多うれ月十日の申蒸すかしく加す
 炭日よ物一七十日をとてこれと用ぬそのの
 たりやと注ぐ水と蒸かす入毎夜此をいして
 蒸す方よ蒸す汁を煮く又蒸す汁を蒸す
 汁を入るの蒸す汁と蒸す汁を煮く蒸す汁
 蒸す汁の内蒸す汁を換すたる蒸す汁と蒸す汁
 蒸す汁の蒸す汁を蒸す汁と蒸す汁と蒸す汁
 蒸す汁を入るの蒸す汁を蒸す汁と蒸す汁

元乃細陰也乃細本と異月と夜とぬくハそれハ細本ハ
志常ハ所とよりぬくハ子と一又ハ月を流る所
才ととよりく一

夏月改更と志法 養和 皇本整にニ千々 権業 刊研 望

經事して氣とて性丸と 多知よんと禁と君家
為身よりく一又龍乃骨と性ハ改時氣とカカレ
骨と一ととく一ハ魚の骨ハ禁之ハ改と志又
深萍と鬼流とと改てと一ハ月令度業子カカ
一ハ又千金月令といハ月と深萍と有く陰年ハ
一雄業よすてと禁之ハ改を辨と志より又二月

又日田中の深萍とカカ龍一ハ改更ハ血と有く一ハ
禁と一物と一ハ改すカカと一ハ改更一ハ後志して
考と一ハ禁之ハ改更と志と君家ハ改より一ハ
麻の葉とけつと一ハ改と一ハ改と一ハ改と一ハ改と
志と一ハ改と一ハ改と一ハ改と一ハ改と一ハ改と
カカ一ハ改と一ハ改と一ハ改と一ハ改と一ハ改と
カカ一ハ改と一ハ改と一ハ改と一ハ改と一ハ改と

貴田持扇摩羅志撰被蓋抄印改除

○又煙多者亦少... 此ハ煙多ク... 又重多ク...

五月乃乃世人... 痛く死する幸... これと重秘...

膀胱の病... 大蒜とつ... 葉とわ...

五六月天氣... 生解散... 湯參芪...

志... 黃芪... 白扁豆... 加茯苓...

凡果實乃時移會と後者一と種ておぼしむるものあり
 夢世毎元よりくち月其入房勝似多膏旨又孫文
 ンノ、及内流気内ノ休一惡毒外と毒子ノノ
 甘く風ノ巾ナリ冷物と食ふ者果地紅蓮と生ん
 暖をう抽と食飲して大ニ飽るものあり

穀類を食ふもの日よやむみまくと濃い実定流ノ收
 て又もよ濃く一五日年の草一は冷水とそい
 冷物お通て紅弁九は抽て月令裏葉よりえたり又
 老圃ハノ味を性膏さめらる用みくと濃くひ子お
 後、一と似似るもの多く濃物よえそや濃く

月令度高よりく六月は松楊よ水とくくた土とくい
 ノ原羊の膏と壅之ハ実多一

秋のは颶風吹取すくハ何くく一めそ物とす一松を
 固く一第五乃松を堅くま一又栲栳事と物一
 月並と食ハ目と昏す羊肉とくハ神膏と湯ハ
 聖息厚鷲菜菓と食す一と忘又生葉と食ハ水瘧
 とすハ犬の狗よ噬ハれハ終身患とすハ冷食と高
 用一冷水生破果油膩甜食とる食すハるハカ
 凡葉炒燻食ハる味宜く少く用一
 凡食ハる甜瓜とる食すハるハカハのあり今

土のハ大に毒ありし月令廣義より云ふ又云く双
 等乃凡々と殺又油餅と云ふ一之食り一此物執ね
 威志よ此ハ白朮と云ふ 煨と云ふハ凡と食し一之後
 白朮と食し一又麝香もよく凡と消泥す又石脂
 魚と鯨食す是ハ能凡と消して水となひて此等皆
 六月ハ六候第一温風至中二蟪蛄居壁中三鶯乃
 学習（まがら） 大小寒ハ二候なり牙曰腐草の螢（あき） 中五
 土潤溽暑（しづ） 中六大雨（あめ） 内（うち） 六小暑（あつ） 外（そと） 二候なり
 小暑（あつ） 外（そと） 二刻二十四分在二十九刻四分大暑（あつ） 外（そと） 五
 八刻二十四分夜四十一刻四分（あつ） 外（そと） 月令廣義

土用（どよう） 又土王（どおう） もくろ

春ハ木旺（もくたう） 一夏ハ火旺（かたう） 一秋ハ金旺（きんたう） 一冬ハ水旺（すいたう） 寸
 五ハハハハ土ハ四時ハ皆ありわくすも一之事なり
 故よ完（かん） けり位（い） ちる事なり執事ありして四時ハ
 初（はつ） ちり辰（ちん） 戌（しゆ） 戌（しゆ） 丑（う） 月（げつ） の事ハ以寄旺（いよたう） ちりなり若
 十八日一年よとて七十七日あり此七十七日との
 ろく時を木火金水と又各七十七日つゞけ一
 一年とたひて去るはよ土を木と替りてあるは土
 用ハ也と云ふ秋の土用ハ土意著して威（い） ちり一冬
 乃土用ハ水と云ふは也と云ふは也と云ふは也土

用也之。金之。六万。より。吏。六。大。よ。ま。せ。り。成。る。な
の。五。月。に。之。く。一。一。十。五。万。金。を。出。す。と。云。く。金。を。出。す。は
あ。り。秋。乃。金。と。上。下。り。ま。す。こ。の。多。り。未。だ。月。を。大。金。の
有。り。あ。り。又。一。一。十。五。万。の。中。に。有。る。れ。は。中。央。の。土。金。を
さ。す。又。掲。ぐ。又。の。の。席。と。が。ひ。乃。こ。の。あ。り。月。金。を
之。を。次。れ。次。に。中。央。の。土。と。の。ま。り。 和。西。儀。主。席。の。百。月。と
し。る。こ。の。一。一。十。五。万。の。後。と。多。れ。は。
了。れ。理。が。た。り。と。ま。り。と。中。

儀。礼。又。五。月。之。月。は。八。日。燕。及。夜。少。豆。と。金。也。ハ。瘧。疫。と
之。に。之。今。の。人。の。な。り。と。さ。り。事。り。あり。これ。ハ。俗。氏。の。終
乃。華。と。本。れ。也。と。云。く。ぬ。ち。け。さ。り。や。と。云。ふ。る。り。や。

儀。礼。之。終。乃。き。う。やく。を。燕。と。り。と。何。れ。ハ。ゆ。い
一。と。う。り。ま。り。を。け。る。と。う。と。さ。り。と。う。け。れ。と。志。
乃。乃。ハ。一。一。十。五。万。の。後。吹。く。と。云。く。昔。人。の。五。月。に。食。五。辛。
以。礪。厲。氣。也。強。莖。莖。韭。蒜。薑。也。又。賦。法。方。に。元。日。及
八。日。麻。子。小。豆。各。七。枚。と。祭。に。疾。疫。を。清。す。と。り。り
こ。の。た。る。の。儀。初。の。ま。り。か。ん。ひ。事。し。と。さ。り。と。う。り。め。け。
事。と。他。く。あ。や。ま。り。て。五。月。は。す。り。と。わ。れ。地。獄。乃
人。よ。と。さ。ぬ。く。一。

儀。礼。又。五。月。之。月。乃。中。に。祭。と。す。一
五。月。上。旬。の。初。は。藺。と。す。一。藺。と。分。辨。と。す。一。泄。瀉。と。す。

四乃入一多やまざる用とくこれに強けり
製えたり病人は用多能為^{アキ}と強^{アキ}と用^{アキ}
を^{アキ}とく^{アキ}

本草綱目記卷之四

